

平成 28・29 年度 第 1 回 神奈川県産業教育審議会概要

平成 28 年 8 月 2 日（火） 14:00～16:00 神奈川県教育委員会 委員会会議室

【出席者】◎河野 隆二、○角田 浩子、村木 薫、馬鳥 敦、杉山 久仁子、松本 里香、
星野 妃世子、本田 由紀、目迫 公雄、廣瀬 道、佐藤 均、後藤 宗治

1 事務連絡（事務局）

- ◇資料確認
- ◇定数確認
- ◇会議の公開について

2 神奈川県教育委員会あいさつ（折笠指導部長）

- ・神奈川県産業教育審議会は、産業教育の推進に大きく貢献している。
- ・平成 28 年 1 月には、県立高校改革実施計画 I 期が発表され、4 月からすべての県立高校で改革に取り組んでいる。
- ・II 期以降の産業教育に関する計画策定に向けて御意見をいただきたい。

3 委員紹介（岡野高校教育課長）

4 会長選出（事務局）

（互選により河野委員が会長に、角田委員が副会長に選出された）

会長あいさつ（河野会長）

- ・県立高校改革 I 期については、すでに発表されており、専門高校においては、本審議会の審議内容を基にして、II 期以降の改革案を作成すると聞いている。
- ・本審議会は、非常に重要な役割を担っている。
- ・実際に議論をする時間はそれほど多くない。したがって、活発な御議論をお願いしたい。

副会長あいさつ（角田副会長）

- ・本業で得られた情報を皆さんに提供しつつ、副会長として神奈川県の専門高校のために、がんばりたい。

5 審議依頼及び説明（折笠指導部長）

（審議事項）

「県立高校改革実施計画に係る専門高校のあり方」について

- (1) 本県の専門高校に求められる役割
- (2) 本県の専門高校における学習機会のあり方
- (3) 本県のこれからの専門高校のあり方

（理由）

- ・「県立高校改革実施計画」において、専門学科については、「将来のスペシャリストの育成」、「将来の地域産業を担う人材の育成」、「人間性豊かな職業人の育成」という 3 つの

人材育成の視点に基づき、生徒の多様な進路希望に対応した教育課程となるよう、より一層の改善に取り組むこととしている。

- ・産業教育系の専門学科を設置する高校の教育内容については、県産業教育審議会の意見を参考にするとしていることから、「県立高校改革実施計画に係る専門高校のあり方」について審議をお願いする。

6 審議

(1) 審議会の進め方

(河野会長)

- ・審議会規則第6条では、「審議会は、その所掌事項に係る専門的事項を調査審議させるため、専門部会を置くことができる」とある。
- ・今、折笠指導部長から、審議会での審議依頼事項の説明があった。
- ・この審議会は、大変大きな課題をまとめなければならない。そこで、効率的に審議を進めるために、専門部会を設置し、次回の審議のために、課題を整理してもらいたいと思うが、いかがか。

(異議なし)

(河野会長)

- ・専門部会の設置が認められたが、専門部会の委員は会長が指名することになっている。その委員構成について、事務局に何か(案)があるか。

(事務局)

- ・主に産業教育に携わる教育関係者を中心に、過去の審議会で設置した専門部会の構成にならない、専門部会の委員構成案を作成した。
- ・審議委員である後藤委員と大平委員には、専門部会委員もお願いしたい。
- ・また、今回は、「県立高校改革実施計画に係る専門高校のあり方」について審議していただくことから、各学科の代表として、農業・工業・商業・水産の各高等学校から校長各1名、そして、農業・工業・商業・水産・家庭・福祉科の総括教諭又は教諭を各1名と考えている。
- ・なお、県立高校で初めて家庭に関する学科を設置することから、すでに設置している川崎市立川崎高等学校の家庭担当の教諭を1名考えている。
- ・さらに、県立高校としての立場から神奈川県高等学校の校長を1名、中学校の立場から神奈川県公立中学校校長を1名、また、行政関係として環境農政局から1名、産業労働局から1名と考えている。
- ・御意見を願います。

(意見等 特になし)

(河野会長)

- ・ただいまの事務局案を参考にして、専門部会の委員を指名したいと思う。具体的な人選については、事務局と相談の上、行いたいと思うが、よろしいか。

(異議なし)

- ・では、そのように進めさせていただく。後日、専門部会名簿を事務局から委員の皆様へ送付する。
- ・次に、「審議スケジュール(案)」について審議する。説明をお願いする。

(事務局)

- ・本審議会は、平成 28・29 年度の計 5 回で、「県立高校改革実施計画に係る専門高校のあり方」について、御審議いただきたいと考えている。
- ・審議題の内容として、「Ⅰ 本県の専門高校に求められる役割」、「Ⅱ 本県の専門高校における学習機会のあり方」、「Ⅲ 本県のこれからの専門高校のあり方」について、それぞれの項目ごとに御審議いただき、平成 29 年 6 月を目処に「中間まとめ」の審議をお願いし、その後更に議論を深め、平成 30 年 3 月を目処に「最終報告」の審議をお願いしたいと考えている。
- ・なお、専門部会は、平成 28・29 年度で計 6 回開催する予定としている。専門部会は、審議会開催後に開催し、各回の審議会の審議内容を踏まえ、次回の審議会に向けた調査研究・資料作成や中間まとめ案・最終まとめ案の作成をする。
- ・御意見を願います。
(意見等 特になし)

(河野会長)

- ・審議スケジュールについては、資料のとおりとする。

(2) 審議の論点

(事務局)

- ・まず、神奈川県専門高校における現状について、簡単に概要を説明する。
- ・はじめに、県立専門高校の設置状況について。
- ・本県の県立高校としては、専門高校は 22 校・1 分校あり、その内訳は農業が 3 校 1 分校、工業が 9 校、商業が 5 校、水産 1 校、看護 1 校、福祉 3 校、理数 1 校、国際関係 2 校、その他の専門学科が 3 校となっている。
- ・県立高校改革実施計画 I 期における専門学科の改編については、農業に関する学科は、吉田島総合高校の総合学科が農業科に改編し、平塚農業高校初声分校は定時制農業科から全日制農業科に改編される。
- ・家庭に関する学科として、吉田島総合高校の総合学科を改編し、新たに家庭に関する学科が設置される。体育、音楽、美術、国際に関する学科については資料のとおりである。
- ・また、専門学科高校の再編統合は、平塚農業高校と平塚商業高校が再編統合し、農業科と商業科を併置した専門高校に、三浦臨海高校と平塚農業高校初声分校が再編統合し、普通科と農業科を併置した高校に再編統合される。なお、平塚農業高校初声分校の農業科は全日制に改編される。
- ・その他の専門高校の再編統合は資料の通りである。
- ・次に、生徒数の状況だが、県内公立学校の割合では、7.91%であり、全国の状況に比べて本県の専門高校の生徒数の割合は低い。
- ・次に、入学者選抜の状況だが、学校・学科ごと、また年度ごとに差はあるが、専門学科全体を公立高校全体と比較した場合には、大きな差はない。
- ・次に、高等学校卒業後の進路状況だが、大学・短大・専門学校等を合わせた進学が約 5 割、就職が約 3 割で、全国の状況と比べると、進学の割合が若干高い。
- ・続いて、審議の論点について。

- ・「Ⅰ 本県の専門高校に求められる役割」については、産業構造の多様化、産業技術の高度化に対応した人材育成をするためには、どのような教育内容が考えられるか、中学生及び保護者、地域産業界や大学等上級学校のニーズに応えるために、専門高校においてどのような教育内容が考えられるか、御審議をいただきたいと考えている。
- ・「Ⅱ 本県の専門高校における学習機会のあり方」については、生徒の学習意欲や興味・関心、進路希望の実現に向けた学習ニーズに対応するため、大学、職業技術校等の教育機関や企業などとの効果的な連携はどのようなものが考えられるか、また、「県立高校改革実施計画」で示された、「県立高校生学習活動コンソーシアム」を活用した効果的な専門教育活動を実践するためには、どのような学習機会が考えられるか、御審議をいただきたいと考えている。なお、「県立高校生学習活動コンソーシアム」については、配付した資料 10「県立高校改革実施計画」の 10 ページに資料が記載されている。
- ・「Ⅲ 本県のこれからの専門高校のあり方」については、1 点目として、各専門学科のあり方について、それぞれ、家庭に関する学科、工業に関する学科、農業、商業、水産に関する学科、その他の学科について、学科のあり方や教育内容の充実について、どのような方策が考えられるか、御審議をお願いしたいと考えている。
- ・特に、家庭に関する学科については、高校改革において、県立高校として初めて設置される家庭科の教育内容の充実について、工業に関する学科については、これからの地域産業を担う人材育成のための工業科の適正な配置についても御審議いただきたいと考えている。
- ・2 点目として、教員の人材育成のあり方について、専門高校の教員の技術・技能及び実践的指導力を向上させるためには、どのような方策が考えられるか、あるいは、教員の人材育成を行うために、公的な機関、産業界、大学・短大・専門学校との効果的な連携について、どのような方策が考えられるか、御意見をいただきたいと考えている。
- ・論点に沿った参考資料について、まず、1 ページには、専門高校の全国における状況及び本県における状況について、記載している。
- ・2 ページには、本県の前回の県立高校改革推進計画をはじめとした専門学科の改編について、整理して記載している。
- ・3 ページには、専門高校に関する中央教育審議会の答申を抜粋し掲載している。
- ・4 ページには、専門高校へのニーズであるが、中学生には、専門高校の取組が十分に理解されていない現状があったが、保護者からは、資格取得の推進、専門分野の技術・技能や知識の育成、実践的な授業の展開等が求められている。
- ・また、産業界からのニーズについては、5 ページから 8 ページに各専門学科の分野ごとに記載している。
- ・8 ページには、専門高校における課題について、産業構造の変化や社会のニーズを踏まえつつ、県立高校の専門教育の充実に向けて検討や県内の地域産業を担う人材を育成するため、地域固有の自然環境や、歴史、風土などをいかした専門教育の推進について検討、将来のスペシャリストを育成するため、各専門学科において、職業に関する様々な知識や技術の取得に必要な学習内容と教科・科目との関連性を明確にし、その過程の可視化及び明確化を図る必要性や、施設設備については老朽化が進んでいる現状から、計画的に改善していく必要性、団塊の世代が大量退職を迎えていることから、若手教員への技術・技能の継承等の課題を記

載している。

- ・さらに、各学科の課題についても併せて整理している。
- ・10 ページには、本県の専門高校の学習機会のあり方について、現状と課題について中教審答申等の資料の抜粋を記載している。
- ・13 ページには、本県の専門高校と大学等の連携の現状と課題について具体的な取組を記載している。
- ・14 ページには、今後の学習機会のあり方について、関係機関との協力体制の確立について、参考として前回の産業教育審議会の報告書から抜粋したものを掲載している。
- ・15 ページには、県立高校におけるコンソーシアム構築と連携のあり方について、県立高校改革実施計画の一部を抜粋し記載している。
- ・16 ページには、これからの専門高校のあり方について、手立てとして考えられることを記載している。こちらは、審議の中心となってくる部分であるので、今後の審議会での活発な御審議をお願いしたい。

(3) 審議

(河野会長)

- ・これより内容の審議に入る。説明していただいた、論点を踏まえて、審議を行う。
- ・本日は1回目の会議なので、自己紹介も兼ねて、委員それぞれの立場から、「専門高校のイメージ」「これからの社会のとらえ方」「神奈川の産業の特色や課題」「学校の取組や課題」などについて、お考えや御意見をお話いただきたい。
- ・また、先ほど事務局から説明のあった、「審議の論点」に対して、御質問や御意見などあれば、併せてお願いしたい。

(杉山委員)

- ・教員養成の学科にいますが、食物調理などの食品工学的な部分が専門で、新しい家庭科に関する学科には大変興味を持っている。
- ・専門高校から本学に入学する学生はほとんどいないため、専門高校の実情は分からない。今回、審議が進む中で、御意見させていただきたい。
- ・また、自分が高校生の頃とは、だいぶ感覚が違っていると思われるため、審議の中で併せて勉強させていただきたい。

(松本委員)

- ・大学一年生に対して、基礎の化学を主に担当している。
- ・本学では、たまに商業とか農業からも入ってくるが、工業高校出身の学生が多い。
- ・熱心にやっているが、基礎学力がたりない。特に、数学、英語ができなくて苦しんでいる姿をよく見る。
- ・個人の話になるが、理科と工業の免許を持っている。
- ・専門高校で化学の授業はあまり多くなく、残念な思いをしているが、本学の学生を見ていると、工業高校に関心が沸く。
- ・1点伺いたい。家庭に関する学科というのは、工業とか農業とかと同じように家庭科という学科を作るとのことか。

(岡野高校教育課長)

- ・そのとおりである。
- ・県立では、初めて設置する学科である。吉田島総合高校は、農業科と家庭科の併置校となる。
- ・例えば、農業科で農産物ができ、それを家庭科がアレンジして、商品化していくなどということも考えられる。
- ・農業科と併置している家庭科というのを念頭に置きながら、アイデアをいただきたい。

(星野委員)

- ・産業界から参加している。私の会社は製造業で、工場といわれるラインが、新潟県の十日町市と千葉県勝浦市にある。
- ・農業や水産業が盛んなところで仕事をしており、環境に対する配慮も考えながら会社を営んでいる。
- ・昨年は、新卒の女子が入社しており、今後も高校生を入れていきたいという考えもある。
- ・この審議会で高校生の勉強のあり方等いろいろと考えたい。
- ・事前にいただいた資料を見ているが、課題が多くて、何から話したらよいかまとまりがつかない。今の県立高校というか、神奈川県全体の高校の実態を見ていなかったと考えさせられている。話を伺いながら、産業界からの提案ということで話をしたいと考えている。

(本田委員)

- ・私は、今の高校において、専門学科が少ないことは、問題ではないかと指摘してきた。
- ・国際比較で見ても、特にヨーロッパの国々だが、多くの先進国では、後期中等教育段階での専門教育に力をいれている。
- ・日本は、高校段階での専門教育が少なく、その中でも非常に少ないのが神奈川県である。
- ・神奈川県は、専門学科ではなく総合学科に力を入れてきたようだが、今回の改革では、専門学科にも力を入れており、ありがたいことだと思っている。
- ・私は、高校段階で特定の専門分野の教育を受けることについて、就職のためということに限られない、教育上の意義があると主張している。
- ・大学進学において、基礎科目で苦しんでいると聞くと、そこは高大の連携で乗り越えていくべき課題ではないかと考えている。
- ・ただし、ゆとりがある高校生ばかりではないので、高校を出て正規に就職ができるということも、専門学科の重要な役割の一つであり続けていることは確かであり、その要望をどうやって実現していくかも非常に大きな課題である。

(廣瀬委員)

- ・専門学校から参加している。調理と製菓の専門学校をしており、調理と関連深い農業にも力を入れている。
- ・内閣府 食の6次産業化プロデューサーのワーキンググループの委員でもあった。そのような立場からも話をしたい。
- ・産業構造が多様化しているが、工業高校、水産高校、農業高校がどこまでの産業を目標とするのか考える必要がある。
- ・今は、曖昧になっているような感じがする。どこまでの産業構造を担う人材育成の基本を作るのか。専門高校としてどこまで目指していくのかというような、目標設定を明確にしてい

くことが今後必要ではなかろうかと感じている。

(目迫委員)

- ・産業教育審議会は2度目の参加となる。会社員と言う立場から、前回の時も辛辣な意見等も申し上げている。
- ・私の会社は、建設業の電気工事をやっている。
- ・現場では、電柱に登ったり、地上 120mのところにある送電線を渡り歩いたり、または熱中症になるような環境で汗を流して働いている。
- ・私自身は、人事労務を 30 数年やっているが、最近は人材育成を担当している。
- ・当社は、新卒入社 の 85% が工業高校生である。
- ・インターンシップやキャリア教育について、耳に痛いことを申し上げるかもしれない。

(後藤委員)

- ・私は、工業高校を卒業して大学に行き工業高校の教員になった。今は、母校の校長をしている。
- ・生徒たちは、元気で、私を見ると、校長であると同時に、先輩として接しており、毎日楽しくやっている。
- ・工業高校だけでなく、専門学科高校は色々な課題を抱えている。ここで大きく改革ができればと思っている。
- ・生徒たちは、日々専門に対するプライドを持って勉強をしていると感じる。
- ・先日の「ものづくりコンテスト神奈川大会」では、本校機械科の3年生の女子が、旋盤部門において県大会で優勝し、関東大会に出場することとなった。
- ・大会の前に激励に工場に行くと、手際よく生徒たちが機械を操り、物を作っている。その生徒の目の輝きは、これこそ専門学科高校で学ぶ生徒達の強みだと感じている。
- ・好きなことを見つけて、それに向かって夢中になる姿というのは、非常に尊いと感じている。
- ・しかし、設備の老朽化、指導する教員の高齢化等、現場には課題がある。魅力ある専門教育のために力のある教員を育てていくとともに、専門学科を学んでいく生徒たちが減少することに危惧を抱いており、本審議会で専門学科高校の魅力をどう発信していくのかも含めて御意見いただき、現場に還元していきたいと考えている。

(佐藤委員)

- ・中学校の立場から言うと、子供が大人になっていくのが段々遅くなっていると感じる。
- ・少し前までは、小学生だと保護者なしでは物事が進んでいかないという状況だった。
- ・今は、中学校がそういう状況。かつての小学校と同じ状況で、すべて保護者を經由しないと進んでいかない。
- ・高校もそうなりつつあるのか、なかなか子供から大人になっていかないという状況があり、早い段階で進路決定をするには難しさがあり、特に専門高校については、中学校の進路指導としてはどうしても慎重にならざるを得ないところがある。
- ・本人の意思が固いとか、あるいは家を継ぐとかがなく、迷いがある場合は、普通科の方へ行く傾向がある。
- ・そういうところが倍率に影響していると感じる。
- ・1年生では全体を学んで、2年生から各専門の系列に進むことができる学校もあるが、さら

にもう少し弾力的に、普通科に入学後、希望によって専門高校へ転校できるなどの運用がされると、中学生としては考えやすいと思う。

(馬島委員)

- ・組合の代表をしているため、一年中県立高校 143 校を回って、組合員の声を聞いたり、施設設備を見ているが、神奈川県立高校の耐震化率は全国で 47 番目である。老朽化率で調査したら、多分 47 番目だと思う。特に工業高校の施設設備は非常に古い。1960 年代の施設設備がいまだに使われているということで、中学生がびっくりした学校もあるという。
- ・そのような中で、この 12 年間の県立高校改革がこの 4 月にスタートしたが、これを絶好のチャンスとして、県立高校の校舎、施設設備の更新はぜひ進めるようにお願いしたい。
- ・2013 年度から、高校の無償化制度が見直しになって所得制限が入ったが、75%の生徒には奨学支援金というような授業料に相当するものが支給されている。
- ・専門高校では、支給の割合が高く、大体 90%前後である。これは、専門高校の生徒の保護者の収入が全体として低い傾向があり、支援の必要な生徒が多いと推測される。
- ・そういった意味から、進路補償も含めて、支援が必要であると考えている。
- ・就職する生徒も多いことから、専門高校では規範意識の養成だけではなく、労働者として働くことの意義や権利も学ぶ労働教育が導入されることが、必要かと考えている。

(村木委員)

- ・専門高校については、勉強していく立場で参加しているが、藤沢市がロボット産業特区になっており、介護医療と災害、生活支援などの分野で、ロボットの研究が行われている。2月の終わりから3月にかけて、ロボットタクシーの実証実験もあった。
- ・2020年のオリンピックを目標に、ゆくゆくは無人のタクシーを実現したいということらしいが、インフラ面や法のことを考えると、すぐに変わるの難しいと思っている。
- ・また、そうすると経営者として、ロボットタクシーの価格が合えば、雇用を切らざるを得ないのかまで考える必要がある。まさかこんなことはすぐには起こるまいと思っていたことが、タクシー業界ではすでに起きている。
- ・また、並行してロボットとか人工知能が様々な雇用を奪っていく未来があるのでないかということも、何かで読んだような気がして、ゆくゆくは色々な産業でロボットに取って代わられると言ったらおかしいが、そうなってくると、飛び抜けた技能であったりとか、人格であったりとかを持っていないと厳しいと感じる。
- ・そういうことまで考えた教育が必要かどうかと考えている。

(角田副会長)

- ・前回の審議会での議論では、地域に就職する人材を作るのか、或いは大学進学させる指導に注力していくのかというところで議論があったが、全国的には両方あり、大学進学に向けた専門高校の取組は進んでいると感じる。
- ・他県の例では、大阪ビジネスフロンティア高校では、商業高校だが、ここは7年間のプログラムとしてカリキュラムを構成し、五つの大学と連携して、大学の先生が高校1年生から3年生までの教科書を書いている。
- ・すなわち、大学側が、高校で勉強して欲しいビジネスの内容を学べるようになっており、ワークブックは高校の先生が作っている。

- ・グローバルビジネス科では、これからの商業教育に必要なのは、英語と会計とITであると絞り込んで、資格取得もそれだけに限定している。また、提携した大学では特別入学枠を用意している。
- ・高校で勉強したことを活かして特別入学して、大学でさらに深く学ぶことができる。例えば、国際会計検定の勉強をし、大学に進んでからは、米国公認会計士の資格も取れるような、そういった流れが高校と大学をつなげてできるようになっている。
- ・また、工業系だと、今年4月に開校した京都工学院高校では、プロジェクト学習をメインとした学科と、理数系大学進学をメインとした学科の2つがある。オバマ大統領が推奨してアメリカで始まっている、科学と技術と工学と数学を一緒に学び、知識を活用するところまで学ぶような、そういった新しい教育もカリキュラムに入れている。専門高校は、普通科の下だなんて思われたくない、素晴らしい可能性があるというような、現場の先生たちの気持ちが強い。
- ・他県では、先進的な取組が始まっており、神奈川県でも全体を引っ張っていくような専門高校が必要と感じる。
- ・また、家庭科の新設については、農業科との併設ということで、今まさに注目されている食のこととか、環境のこととか、経済のこととかを生産者の視点だけではなく、消費者の視点で提案していくような学科にしてはどうかと思う。
- ・専門高校は、すばらしい専門教育が学べる学校なので、在学中に地域課題解決をするような提案をしていくと、周囲からも評価され、認められ、共にいて欲しいと言われる高校になると考えている。これまで以上に、そのあたりを打ち出すような学習内容を考えていったらどうかと思っている。
- ・厳しい現実があるとの話もでているので、その辺の問題も話し合っていきたい。

(河野会長)

- ・委員として、思い切った改革をしていただきたいと思っている。いわゆる形だけのものに終わらしていただきたいくない。
- ・角田委員から、二つ例をいただいたが、他県のように思い切ったことができるかどうか問われていると感じる。
- ・私は、基礎力が重要だと考えている。
- ・先進的な興味のあるものに対して、興味付けとしてはいいと思うが、それで終わってしまっただけではいけないと思う。基礎力が全然身に付いていないにもかかわらず、興味のある分野に少し触れて、ものづくりをやって終わってしまうような形では、卒業してからが難しいと思う。
- ・大学に進学するにしても、社会に出るにしても難しい。
- ・興味付けは興味付けで十分だが、やはり専門基礎力と社会人基礎力をどのように教えるか必要だと考える。
- ・専門高校に、この二つは外せないと感じる。
- ・また、コンソーシアム構想については、非常に期待できると感じている。
- ・行政が要になって、高校、高等教育機関、企業でコンソーシアムを作って、高校教育を推進するという考え方は非常に重要な話だと思う。
- ・コンソーシアムの構築においては、現場の先生方が、どれだけ多く参加するかが非常に大き

いと感じる。先生方の参加がないと、現実には動かないと感じている。

- ・また、月に1回とか年に3回ではなく、実質化するようなコンソーシアムを行わないと、作っただけで終わる可能性があると感じている。そういう形で進めないと、効果が出ないと思う。
- ・本学では、専門高校から入学している生徒が多い。工業・商業のほか農業もいる。
- ・専門高校に入学する生徒は、意欲が高く、その分野について興味があって入学する人と他に行く学校がなくて入学する人など、普通高校より両極端ではないかを感じる。意識の高い生徒は、不満。逆に低い生徒は、ついていけないということが、はっきり出てしまうのではないかと思う。
- ・これまで御発言いただいた中で、三つほど観点があると思う。
- ・一つ目は、論点にもあるとおり、専門高校における人材育成を主とした教育内容をどう考えていくか。
- ・二つ目は、高等教育機関や企業との連携をどのように進めるか。或いは、どういうところに問題点があるのか。
- ・三つ目は、専門高校の各分野の職業は、今後の来るべき時代において、影響を受ける分野が多いと思う。専門高校は職業に直結することから、この辺はどう考えていくのか。
- ・これからは自由に御発言あるいは議論をしていただきたいと思う。

(目迫委員)

- ・専門が建設業で電気工事をやっているため、工業系のことで抽出してしまうが、工業高校から工科高校に改編したところに疑問を思っており、1年生で工業を幅広く学び、2年生以降で分野に分かれているようだが、将来のスペシャリストの育成をうたっておきながら、いかなものかと感じている。
- ・コンソーシアムについては、絵に描いた餅にならないようにしなければいけないと思う。現場の先生方の努力だけではなく、教育委員会として行政の横の連携を繋げて、神奈川労働局とかとのコンソーシアムであったり、インターシップであったりをやったらいかがかと思う。
- ・中小企業では人手不足が続いている。中小企業でキャリア教育をやってもよいという企業が沢山あると思うので、うまく活用できたらと思う。
- ・最後にインターシップについて、取組は良いと思うが、会社見学の延長で終わってしまうところもあるため、高校側がどういったニーズがあるのかというものも含めて内容をもう少し見直されたいかがかと思う。
- ・また、学校の先生にも採用して10年ぐらいの先生は、必ず企業に行つてインターシップをするような制度を設けた方が良い。現場を知っている方と知らない方では、生徒に対する指導が違ってくると思う。

(折笠指導部長)

- ・コンソーシアムの話が出たが、今計画を作っているところである。まず協議会を作って、企業や大学、専門学校の関係者にある程度集まっていたら、大きなスキームをつくっていく。
- ・各高校は、それぞれ取り組んでいるが、学校によってバラバラであったり、形骸化していたり、全然関心のない学校もある。そこで、教育委員会が入って、間口を広げようとしている。

ぜひ、企業側からも入ってほしい。会社の動きを高校生が感じることができるのは大事なこと。こういう取組によって就職のミスマッチもなくなるだろう。

- ・日本の高校生は、大企業ばかりに就職したがらるが、中小企業でも世界的なシェアをもっている企業がある。しかし、なかなかそこに生徒達が向かない。
- ・そういう生徒達を見ると、現状を知るといことは大変重要かと思う。日本の産業を支えているのは、大企業だけではないということ。みんなを支えていることを分かっていかないといけない。
- ・コンソーシアムによって、専門高校生がスペシャリティを感じ取れるような、そういう取組になれば良い。御意見いただきたい。

(岡野高校教育課長)

- ・8月下旬には、コンソーシアム協議会立ち上げのための準備会を開く。

(河野会長)

- ・専門高校のインターンシップの状況はいかがか。

(岡野高校教育課長)

- ・インターンシップは、専門高校以外でも行っている。インターンシップの実施人数や、受け入れ企業も増えている。ただ課題としては、中学校でも1日なり2日なり3日なりのインターンシップに取り組んでいるため、高校で同じような内容であれば、参加への動機が低くなる。今、インターンシップのような就業体験的な取組が、中学校或いは小学校まで降りていく中で、高校でのインターンシップをどう差別化していくかについて考える必要がある。
- ・具体には、高校では、日数が増えると、単位化ができるという大きなメリットがある。
- ・事前の指導とか事後の指導も含めて、35時間相当の実績があれば、単位認定ができる。単純計算で8時間労働だと、3日やったら $3 \times 8 = 24$ となる。24時間では、単位認定はできない。
- ・4日5日或いは3日であっても、事前指導、事後指導に時間をかけて、単位認定ができるぐらいの内容を持てば、小中と差別化が図れる。専門高校では、自分の専門を活かしたインターンシップに取り組んでいるが、普通科におけるインターンシップでは、まだまだ課題が多いと感じている。

(河野会長)

- ・本田委員の柔軟な専門性について伺いたい。

(本田委員)

- ・大学でもそうだが、高校段階での教育は、職業的な意義が高い専門教育がもっと行われる必要があると考えている。しかし日本では、普通科教育というか一般教育、教養教育、人格を高める教育が好まれ、専門教育とか職業教育が避けられる傾向がある。
- ・そこを何とか打開しようとして考えたのが、「柔軟な専門性」という考え方である。日本では専門教育というと非常に硬く狭く捉えられがちで、ある専門分野の教育を受けた場合には、それしかできない人になってしまい、それがリスクになるとして敬遠されがちだが、カリキュラムや或いは仕事についた後のキャリアの設計によっては、ある専門分野を入り口としていても、それをきっかけにして伸び広がるような形で隣接分野等にも関心や知識を広げていくことは可能である。このようなベクトルを組み込んだカリキュラムやキャリアを作ってい

くことが、必要だと感じている。

- ・しかし、私自身は専門学科の専門家ではないことから、「柔軟な専門性」という考え方を、具体的なカリキュラムや科目構成というレベルにまでは落とし込めていない状況にある。具体化していくためには、各専門の先生方の知恵を借りながら、どのように科目を設定・配列していくかを考えていく必要がある。
- ・例えば、ある県の工業高校では伝統建築コースというのがあり、すべて木組みでの建築を教えている。直結する進路というと宮大工になるわけだが、全員がなれるわけではないので、高校に大学教員を招いて、「木で物を作る」ということが人類の歴史や、或いは世界的な空間の広がりの中で、どのような意味や意義があり、どういう分野に関連があるのかを教えている。「木で物を作る」ことの意味を、美術・芸術や或いは通風とか採光、住環境、インテリアなど、関連分野にまで広げながら教えており、単に手技だけではなく、少し視野を広げれば、どういう分野と複雑に絡み合っているか教えようとしている。
- ・このような取組を色々な専門学科で、試したらどうかと主張している。
- ・また、ある県では、他の学校より早い日程で専門高校の入試を行うことによって、学力で不本意に振り分けされるのではなく、少しでも専門分野に興味・関心がある中学生を、先に専門高校へ入学できるような入試をやっているところもある。
- ・これらのカリキュラムや入試の工夫によって、専門高校への進学者が二極化しないように、つまり非常に関心がある人と不本位な人とが分かれられないようにしていくことが必要だと思う。

(折笠指導部長)

- ・先ほどの目迫委員の発言にあった、工科高校について、現場の目線でどう考えているか、後藤委員に伺いたい。

(後藤委員)

- ・最初から専門をガンといくのか、最初はソフトランディングにいくかどっちがいいかわからないが、中学段階で、専門の小学科を選ぶことが難しいということから、工科高校では、総合技術科として募集し、1年生では工業を満遍なく学んで、2年生からそれぞれの専門に分かれている。工業高校では、最初から電気科とか建設科とかの小学科を決めて、入学し、1年生からそれぞれの専門を学んでいる。この違いを明確にするのは難しいと思う。
- ・しかし、学科に対する思いやその分野に対するプライドという面では、小学科を決めて入学している生徒のほうが、1年生からしっかり学ぶんだという強い思いがあるように見受けられる。
- ・どっちがどっちというのはなかなか難しいが、全国的に工科高校が増えてきた経緯はある。

(佐藤委員)

- ・中学校からすると、1年生に満遍なく、その先に絞っていくっていうほうがありがたい。15歳でその先を決めるのはハードルが高い。
- ・できるだけ広く受け入れていただけると、選びやすいのが現実的な話。
- ・先ほど言われた二極化は、倍率の低さから起きているとも思える。また、どうしてもその道に進んだらそこへ行かなきゃいけないというイメージもある。ずっとその道を進まなければならないと決断するのは難しい。保護者も同様。

(河野会長)

- ・二極化の話だが、入学試験のしくみを変えろという発想は、そういう方法もあるんだと初めて知ったが、東京から離れると、専門高校のランクが上がるとも聞いている。例えば山形であるとか新潟であるとか、青森であるとか、専門高校は、その県の中で、三番目とか四番目とか、そのような位置付けを占めている。
- ・神奈川県では、どうしてこうになってしまうのか。

(岡野高校教育課長)

- ・首都圏の高校の構造というのか、進学志向が強い傾向がある。想像だが、地方と違って階層的にならざるを得ない雰囲気があるのではないかな。
- ・そうすると、やはり最初に普通科という選択肢が来てしまう。

(折笠指導部長)

- ・地方では、専門高校から大学進学も結構多いと聞いている。
- ・商業とか工業からかなりの生徒が進学するというのは、そういう体制が整っているのか。
- ・ある地方の有名な商業高校の話だが、商業高校と名を冠しながら、やってることは大学受験に特化した授業をしている例も聞く。本当に商業を学んでいるのか、大学進学のために形だけやっているのか。もしそうであれば、どうなのかなと思う。
- ・先ほど角田委員が話された学校に訪問したいと思う。専門高校でありながら、多彩で、先まで連携している。色々な大学の先生が教えている。確か複数の学校を統合し、一つの方向を作り上げるという大胆な手法を取ったと聞いている。人気も高いと聞いている。

(河野会長)

- ・思い切ったことをやれるかどうか。そこを問われていると思う。しかし、実行するのは非常に難しい。
- ・誰に聞いてもそうだねと言いながらできない場合は、組織的な問題も多い。やれるところはやれている。
- ・進学率についてだが、最初の説明では、神奈川は高いほうだと聞いたが、そうであれば地方では、進学ばかりではないということになる。
- ・そののところに何があるのか、考える必要がある。

(折笠指導部長)

- ・そのあたりは、我々でも調べられる。

(星野委員)

- ・弊社は、新潟と千葉に会社があるが、弊社がある周りの高校では、工業高校が総合高校になってしまっている。地方自治体の中の産業構造にもよるものかと感じている。
- ・企業の誘致が少ないと、保護者が進路を考えたときに、いわゆる地方公務員ばかりを考え、少ない中小企業には目もくれない。公務員以外では、建築か農業ぐらいしかないと思われており、保護者の理解を得ないとなかなか就職に結びつかない。最近では、ある学校でバスをチャーターして高校生と保護者が一緒に企業訪問をするなどの計画もあるらしい。
- ・こういうことから、その地方の産業構造によるところが大きいのではないかなと思う。
- ・神奈川は、神奈川スタイルがあってもいいのではないかな。神奈川の今の産業構造の中で考える高校生のスタイルがあってもいいのではないかな。地方は地方のやり方があるし、今の実態

をとらえるべきではないかと思う。

(河野会長)

- ・杉山委員に家庭科の専門家として御意見を伺いたい。

(折笠指導部長)

- ・農業と組んだ家庭科を作ろうとしているので、コンセプトについてどう思われるか。

(杉山委員)

- ・もともと農業からの移行であり、農業と併設にすることから、それを前提としたい。
- ・生産よりの考えと消費者よりの考えというか、利用する側が食をどうあるべきかと考えながらどう利用していくのかとか、食の安全だとか、家庭経済とかとも連携した形で、ただ食べるだけではないやり方があると考えている。
- ・農業側も、作るだけじゃない領域は持っているはずなので、そことどうリンクするのかとか、本当に食だけに特化していくのか、一昔前の家政科のようなものも含むのか、色々なイメージを持たれるので、しっかりとしたコンセプトでやらないと、何のための学科なのかわからなくなる。
- ・大学でも、何のために、どこの大学に行くかと考えずに入ってくるような学生が山ほど増えていて、うちのような教員養成を専門とする大学ですら、教員になることを前提として入ってくるはずが、そうではない学生が入学時点にいるというような状況なので、さかのぼっていけば、中学の時点で専門を選べるのかと言われると、確かにすごく難しい。
- ・大学生ですら、何をやっていいのかわからないまま入学しているような状況なので、高校時点で専門と言えるようにするには、自分がどこに興味を持って何をしたいのかしっかりと考えることができるような小学校教育とか中学校教育が裏打ちされないと、一昔前の「普通高校にいけないからだ。」となってしまう。そこは合わせて考えないといけないと感じる。

(河野会長)

- ・家庭に関する学科を作る目的、目標について伺いたい。

(折笠指導部長)

- ・吉田島総合高校は、農業と林業を長い間やってきた時代があり、学校の特色として、神奈川県が取り組んでいる未病についても取り組んでいたりと、食で地域を活性化できないかということも考えていた。農業も6次産業化が進んでいるが、そこに消費者的な考えをいれていこうということ。
- ・三重県の相可高校は、高校生レストランというものがあり、社会でも通用するプロになれるような取組があり、高校生ながらも食について色々な考えをもっている。農業と組んだ新しい家庭科を作りたい。

(廣瀬委員)

- ・私も高校生レストランは見学したことがあるが、人口が少ない町でありながら、どこから来たのかと思うぐらいたくさんの方が来店していた。地域の専門学校との協定によって、高校の定員が製菓20名、調理20名となっているようで、一切オーバーできないらしい。体験入学の希望者だけでも定員の何十倍と中学生が来るということである。
- ・地方でも、たくさんの中学生在が集まるということは、専門高校のように特徴ある教育というのは、高校卒業後の進学率が高くなればいいのかという話ではなく、一番大切なのは、職に

就くためのプログラムを持ってるかということが非常に大切だと思う。

- ・現実にその学校の 40 名は、ほとんどが外食産業に就職しており、東京、大阪、京都など都市部にも就職をしている。
- ・このことから、例えば家庭科の教育にしても、農業に関わる内容もひとつだし、私は福祉に対する食も必要だろうと思うし、また、労働人口が少なくなってくるようであれば、いわゆる集団給食的な調理方法ということも必要になる。色々な可能性を考える必要があると感じる。

(河野会長)

- ・職業直結は、専門高校の役割であって、魅力であると考えている。そのプログラムがないというのは考えられない。
- ・本日いただいた御意見を踏まえて、専門部会で調査研究をお願いしたい。

7 事務連絡

◇今後のスケジュール